

正宗白鳥

秋風記

秋
風
記

一

岩野泡鳴は、ある知友の逝去した時に、「死ぬやつはばかだ」と放言した。そう言った泡鳴もあっけなく死んでしまった。私はいたずらに長生きしたために、若い時分からの知友の死をひんぱんに弔した訳である。そして、私としては、政治家、実業家、科学者などの死に接するとはちがった感じを、文壇人の死によって感ずるように

なっている。個人的交際はなくつても、その作品によって、死者その人の人生観、宇宙観が推察されるように感じられ、この人は、地獄へ行くか天国へ行くかと、空想されることもあるのである。生物は人間でも鳥獣でも詰まりは同じことで、生きているうちは生きんがために、さまざまにもがいて、死んだら無に帰するのであるとうと、普通人の日常ばくぜんと感じているのと同様に私も感じているのであるが、夭死ようしでも老死でもその生きていた間の心身の動きに永遠の影が映っているのを、他人事ひとごとならず私には感ぜられることもあるのである。文学者のある

種の作品において私はそれを感じるのである。「死ぬやつはばかだ」と言った泡鳴は、永遠に生きることをわれ知らず、心に宿していたのかも知れない。

近来、面識のある文壇人の老死が相つづいていゝ。老死と言つても、私より年少者の死であるのでいかに私が老いているか、生き伸びているかを知らされるようなものである。昨年の秋、吉井勇君が逝去して以来、和辻哲郎、村松梢風、小川未明、外村繁（この人はそれほど老人ではないらしく、私は一度も会つたことがない）、青野季吉、それから、最近の宇野浩二。

小川未明君とは、作品を通して知っているだけではなく、若いころ、ひんぱんに往来して、その日常生活をもよく知っているので、近松秋江が私の頭脳に映っているごとく、鮮明にその人間的陰影を私の頭脳に映している。彼は人なつつこい、子供じみた人がらであつたにかかわらず、人生の孤独をよく口にしていた。旅行から帰った時、「君々、山は孤独だね」と邪氣あどけない笑いをもらしながら言ったりしていた。私もそれに共鳴して、孤独を口にしていたが、彼の孤独感と私の孤独感とは全く異っていた。私の孤独癖は陰性で邪気を含んでいたらしかつた。

未明は、その才能を最初坪内先生に認められ、先生の紹介によって、処女作品は「新小説」に発表され、未明という雅号も先生が名付けたそうである。しかし、彼に取っては運悪く、文壇の趨勢は自然主義の世となったので、その特色ある作品も雑誌などに好遇されなかつた。生活は苦しかつたらしい。それで、私は彼を読売新聞の編輯部に紹介したのだが、彼は夜勤を担任さされた。未明が社会部の夜勤と言うのは、今から考えても、いかに不似合いであったか。山の孤独を嘆ずるロマンチストの未明が、社会の俗事を取扱ふことにはなはだ不手ぎわであつ

たが、毎夜おそく、とぼとぼと、道の遠い自宅へ帰るのも、つらい事だったらしい。石川啄木が朝日新聞の校正掛を勤めていたのと同様の趣があった。啄木がそんな俗務をやらされることを憤慨したごとく、未明もそんな俗務に悩まされることをいまいましく思っていたようであった。そこらの物をたたきこわしたいと、チャイルデイシュの顔で四方を睥睨へいげいして叫んだこともあった。「そんな事をされちや、紹介者のおれが迷惑するよ」と、私はまじめにそういつて戒いましめた。

彼は新聞の夜勤記者たるよりも、売れない原稿に自分

の夢を描いていることに生きがいを感じていたのか、突然「僕はやめるよ」と言っつて、その日からおとなしくやめてしまった。そして、啄木の苦しい人生経験は、その詩歌に現わされているのであろうが、未明にはその苦しい人生経験が、直截に作品に現われることはなかった。独自の夢を夢みながら、時代の流行に迎合せず、一生を自分の好みにまかせて歩んでいたため、童話作家として大成したのであろうが、私は、いつとなく、彼に接する機会を失い、老年の彼の心境などがい知ることもなくなつた。それに、私は、いろんな本を読みあさる癖を

持っていないながら、童話と推理小説はほとんど読んでいない。推理小説なら、アランポーの作品、童話なら、アンデルセンの「裸の王様」ぐらいが心に残っているぐらいである。私は子供を持った経験がないから、童話に魅力を感じないのかも知れない。そういえば、えいじ 嬰兒のごとくならざれば天国に入るあたわずという聖語があるが、私などは、つまりは天国にはいる資格がないのであろうか。

未明は社会主義にはいったこともあったそうだが、私はそのうわさを聞いて、有らずもがなと思った。俗っぽい社会主義と、孤独の夢見る未明と何の関係がある？

二

私は、日常、和歌俳句には親しんでいないのだが、歌舞伎座をみる時には、昔の絵番えばんづけ附代りの解説本に挿入されている吉井勇君の和歌を読むのを例としていた。吉井君死後、それがなくなつたのはさびしい。その月の出し物にちなんだ宜伝的和歌に過ぎないのだが、めつたに会わない作者の風貌を思出しながら気軽に読んでみると、何となく人間興味が催されるのであった。

かつて、芸術院で新たに会員を銓衡せんこうせんとした時、吉井君も候補者としてうわさに上ったのだが、土井晩翠氏は「あんな遊蕩歌人はこういう会からは除外すべきだ」と、まじめに反対した。これは、作者の遊蕩的生活を非難したのではなくって、その作品に遊蕩讚美が現われているのをきらったのであろうと、私は想像した。「吉井に直接そういつてもいい」と、土井氏はいつたりした。しかし、この土井説に同意した者はなかったらしい。

私は、何年か前に、京都で、ある人に招かれて、有名なお茶屋で、一夕を過したことがあったが、私は話はへ

ただし、酒は飲めず、招いた人も気づらい思いをしたらしく「だれかお知り合いの方をお呼びしましょうか」と、私と相談して吉井君を招くことにした。その夜、私は、いつも泊りなれているホテルへは行かないで、このお茶屋に泊ることにしたのだが、日本宿はかえっていい気持であつた。柔かい夜具に包まれ、まくらもとの蘭灯影らんとうほのかにして、しかも水の音が聞えるのであつた。ふと、何とかいう吉井の歌を思出した。「かにかくに祇園は恋し」？何とかして「枕の下に水が流るる」。

私は、京都情調にひたるように感じた。こんなのは名

歌ではあるまいか。私は、吉井のある歌集を読んだことがあるが、それには、芸者や舞い子の名などがはいつていた。「カフェ・プランタン」で私の聞いていた女名前がいくつもあった。プランタンは、西洋のカフェをまねた最初の喫茶店であったが、吉井や私などはよくそこへ通っていた。おりおりは終電車間ぎわにそこを出て吉井と連れ立って帰途につくことがあったが、打ちとけ話なんか一度もしたことがなかった。私が最後に彼に会ったのは一昨年の秋、京都行の汽車のなかであった。昔に変わらないじょうぶそうな顔をしていた。それなのに、間も

なく彼は死んだのである。死の間ぎわに、看護者が彼の病気の経路はよくなっていると云って慰めると「うそを吐け」と、彼は言ったと、雑誌か何かに書かれていた。そのうわさはうそではあるまい。吉井はおのれをあざむかないで、それくらいの覚悟は持っていたのであろう。

私はこの作者の戯曲を記憶していない。あのころの新人の劇作には記憶に価するものはなかったのではあるまいか。ただ坪内逍遙が吉井のある戯曲を激賞し、作者自身それに感激したことを、自分で雑誌か新聞かに書いていたのを私は覚えている。それで、私は長い一生の間に、

おりおりどこかで吉井勇に出会っているにかかわらず、文学についても、日常生活についても、しみじみ話し合ったことは一度もなかった。多くの文壇人に対しても、同様の態度で接触していたので、私は、だれに対しても、親しみを欠いていたのである。それで知人と会って、何かと口をきき合ってもいつも孤独感にとらわれていたのである。吉井君に汽車で会って京都で別れたあと、四国へ行ったのだが、土佐の高知のハリマヤ橋のほとりの旅館に泊ると、その休憩所に、掲げられている短冊に、吉井君の和歌がしるされているのを偶然見つけたの

で、ふとしたでき心で、吉井あての絵はがきに何か書いてポストへ入れた。雑誌社寄贈の日記帳がカバンにはいっていたので住所がわかったのだ。私としては珍しいことである。

私は京都の名所は早くから一通り見ていたが桂の離宮だけは近年はじめて見たのであった。この世界にほこるべき建築と庭園の成立由来は、その道の研究家辻哲郎君の講演で知らされたことがあった。中央公論社主催で、二十年来毎月開会されている国民学術協会には、私ははじめから出席していて、いろいろな学者の専門の話をきか

されているのだが、和辻君もその会の会員の一人として、食後の雑談のうちに、いろいろな感想をもらしていた。元来私とは何の縁もない学者であったが、私はこの会に参加することによって、この人の感想、打ちとけ話を耳にすることになった。氏にはちゃんとした自己の哲学があるらしかった。私は哲学書と銘打たれた書物は、ほとんど読んでいない。少年の時から哲学者は空論をこね回す人で、現実超越の学者で、そこが尊いのであろうと見なしていたが、和辻君の話を知っていると、現実離れのした空論なんかは感ぜられなかった。

和辻君の死去の報に接した時、私は「哲学者の死」ということをふと心に浮べた。哲学は死を克服するか。

三

明治以来の小説家は、それぞれの遊蕩ぶりをその作品に現わしている。由来、京都は遊蕩の本場であるらしくうわさされていたが、私などが小説を読みかけたころには、この土地はまだ小説の舞台になっていなかった。団十郎のような上品ぶった野暮ったい俳優も、はじめて京

都の劇場に出演した時には、多少羽目をはずして遊んだそうだが、文学者で京都に進出して、その遊び場を題材として、京都市的遊蕩の醍醐味をにじみ出させた小説を製作した者はなかった。京大阪の色町などへ行つて、はでな遊びをするには、あのころの小説家はあまりに貧乏であつた。東京では、あちらこちらに芸者などがたむろしていて、小説家もそこの遊蕩光景を作中に取り入れることを得意とすることがあつたが、京阪地方へ出かけて、上方的遊蕩味を發揮したのは、私の知れるところでは、長田幹彦君などがはじめであつた。

札びらを切つての、大^{だいじん}尽遊びに遊蕩の面目が活躍するとは限らず、かえって貧乏人の遊蕩に深刻性が露出することもあるらしく、近松秋江の京都物などに特殊のおもしろみがあるゆえんである。下級の遊女に惑溺した経路を細叙し、相手の女に裏切られたのをおこつて、こんな不人情な人間の住まっている京都なんか焼き払いたいと痛嘆しているところなんか、人間の真剣味が出ているのだが、そうかと言つて、京都のこういう社会の光景や、複雑な情緒がいきいきと描写されているのでもなく、作者自身だけの、けち臭い心理が露出しているに過ぎない

趣もある。遊蕩に死して悔ゆるなき境地に、読者たるわれわれをひき入れるような作品は、まだ文学の社会にも出ていないのである。私はいろいろな作物を読んでそう感じている。そういう意味で、私は近松を読んでさえあき足らぬ思いをしている。文学の極致も、死して悔なき境地を描き得ないのか。私は、若きころ、マコーレーの「ミルトン論」を読んで、そのなかに、蛮人は名音楽をきいていると、陶醉して、首を切られるのも意に介しないと言っているのを心に留めた。音楽にはそれほど魅力があるのか。私自身死して悔いないような音楽をきい

てみたかった。たいていの人間はいろいろな病気に悩まされて死ぬるのだが、音楽死と云ったような幸福な死にざまも人世には存在しているのか。

村松梢風君逝去の報に接した時、あんなに生を楽しんでいたらしい人も、あっ気なく死んだのかと、私の心にも潜^{ひそ}んでいる無常観に打たれた。梢風君についても、私は、他の知人同様、断片的に知っているに過ぎないのだが、彼は穏やかな顔して、落ち着いていた口調で、案外苛烈な人間批評をしていた。彼は見かけによらぬ遊蕩児だそうである。吉原などの遊女に関してには博学多才の知識を

持っていたようだ。私は得意顔して語られる遊女話などには嫌悪を感じるのであったが、私などに対しての梢風の話しぶりは淡々としていて、あの程度ならおもしろくきかれた。彼は中国へは、ただの漫遊か何かの目的があったのか、たびたび出かけていたようだ。西洋に対しては日本人は劣等観をいだいているから、遊びに行っても、気苦労でおもしろくないだろう。中国に対しては、日本人は優勝意識を持って接触されるから気楽でいいとその実情を私に話したことがあった。西洋崇拜の私は、そんな事があるものか、外国へ遊びに行くなら、歐洲あるい

はアメリカだとひそかに感じていた。ところが、梢風も時世のめぐり合せで西洋へも行くことになった。しかし、私は、西洋服の梢風よりも中国服の梢風の方を、服装からして似合わしく思った。彼は世間なみにパリに魅力を感じていたらしいが、ソ連へも行ったようだ。招待された団体旅行であったようだが、梢風はソ連の政治などには無関心であったようだ。今日の文壇人は、政治的に頭脳が発達していて、各人各様か各人一様かの、政治外交その他の意見を発表するのを例としているが、彼は他所よその国の政治などについて角目立つめって論争するのは野暮の

至りだ、他所の事はどうでもいいと思っただけらしい。その地へ行けばその地を自分の好みによって楽しめばいいと思っただけらしい。ソ連に吉原があればその境に入って楽しめばいい、とでも思っただけではあるまいか。

私は、第一次世界大戦後の日本の好景気時代に、半年あまりいなか生活をしたあと、東京に戻って来たのだが、貸家が見つかるまでしばらく飯田館に滞在した。その時梢風君もその旅館に泊っていたので、偶然知り合いになったのである。若いのに世間通らしかった。昼飯の代りに汁粉を食べたりしていた。学生のところ、青柳の大きな

栗饅頭を三つも四つも食べて、あとで胃を苦しめたことを話した。

死せる知人についての私の思出は、概してこんな事ぐらいだ。梢風の作品では、おきまりの「名勝負物語」を幾篇か読んでいる。どれもおもしろい。ことに「津田梅子と下田歌子」なんかが、私には興味深く読まれた。

村松梢風は「死ぬつもりでないのに死んだ」人間の一人ではなかったか。

四

青野季吉君や宇野浩二君とも、友人としての親しい交わりを結んだことはなく、彼らの私生活についても、噂に聞くだけであつた。つまり文学を通じての知り合いであつたのだ。社会運動をやつていた青野君が、文学評論に力を入れた時、私は彼の所説を手きびしくけなしたらしかつた。うろ覚えに覚えてはいるが、公の面憎^{つら}むべしと云つたような、手荒い言葉を用いたことが思出される。私は気の弱い性分なのだが、若くつて評論の筆を

とりはじめた時分から、荒っぽい辞句を弄する癖がついていた。そして、二、三回、青野君と論争を取りかわしたように記憶しているが、要するに、文学上の大した問題が提出されたわけではなかったらしい。

その後青野君は私の作品の愛読者であって、若いころ私のもことから感化を受けたことを、雑誌か何かに書いていたのを読んだ。それなら、あんな悪口を書くのじゃないか。と、後悔に似た感じを起したのであった。合評会とか、何かの会合の席で彼に会うことはあったが、かつての論争に触れた話なんかしたことはなかった。私は昔

は作品批評などをよくやっていたが、私の批評がいかにか作家の心に映ずるかについては無関心であった。新進作家の初期の作品をほめ立てた場合には、それがいつまでも喜ばれ、感謝されたりするのである。その代り、それらの作品を頭からたたきつけたりするといつまでも恨まれるらしい。年を取るにつれて、私はそれに気づいて警戒するようになった。「作家の秘密」と題する訳本を、先日偶然披読ひどくしていると、そのなかに「批評家に二種類ある」と説いてある。「人が何といおうとおかまいなく、自分自身で本を判定する批評家と、だれの感情も害さず

に、最大多数の人びとに賛成してもらうためには、自分がどう考えるべきかを、まず自問自答する批評家である」と。西洋の批評家も、日本の批評家も、批評態度は同じ事かと思われる。しかし、必ずしも前者がいいとばかりは思えない。大してすぐれてもない批評家の独断的批評よりも、多数者の考えを考慮した批評が穏当である場合もありそうだ。

青野季吉は、文学批評を一生の本業としたようである。月々の雑誌小説などにもよく目を通していたらしい。彼の批評態度は、前述の二種類の批評態度を兼ねそなえて

いる趣があつた。信頼すべき批評家であつたといつてもいい。

彼の一生の生活ぶりは、保高德蔵君の詳しい追憶記によつてはじめて知つたので、それまでは、断片的にどこかで会つただけでは、その人の真相はわからなかつたのである。外村繁君のような私小説作家はその作品によつて、作家の実生活がよくわかるのだが、評論家は、時として自己告白をしていても、その人となりは、私など局外者にはよくわからない。

陰惨な死は癌にかかつた人間の死ではないだらうか。

外村君は知っていたが、青野君は知らなかったそうだ。知っていたのがしあわせか、知らないのがしあわせか。どちらにしたって幸福な死ではない。私は、音楽を聞いていると、首を切られても平気だという蛮人の音楽死を羨望するのである。

宇野浩二君とは終戦後、幾度か親しく雑話にふけたことがあった。私は軽井沢から上京しても、泊る家がないかったので、一、二度創元社に泊めてもらおうことにした。宇野君も信州松本から上京しても、宿屋は見つからなかった。創元社へ来ることになった。そして、私と同

じ部屋に、マクラを並べて寝たのであるが、寝ながら話しているうち明け方近くなった。雑談といつても、たいていは文学話であつて、よくも話の種が尽きなかつたと思うほどであつた。私も小説のたぐいは普通人よりもよく読んでいる方だが、宇野君にははるかに及ばなかつた。相手の意見に賛成するとか、反対するとかいふのではなかつて、ただ相手がもぐもぐと、説き立てるのを、うつらうつらと聞いているのが、特殊の文学鑑賞みたいで、私の興味になつたものらしい。その後本郷の下宿屋に紹介されて、宇野君はそこに定住し、私も上京のたびにそ

ここに泊ることにした。二人が火鉢の上に頭を突き合わせ、消えかかる火を吹きおこしたりしたこともあった。その間にも昨今の文学の話をした。森川町から、電車にも乗らずに、日本橋にあった新興の雑誌社へ歩いて行ったこともあったが、その間も明治以来の文人の人となりや、その作品の批判などを、ぽつりぽつり口にしていたのであった。その批判の当不当を論争するようなことはなくって、ただ話を聞いていると、足の疲れを忘れるようであった。

いま回顧すると、何をいったか何を聞いたか忘れてし

まっっているが、その文学話もその作品同様に、独得のとぼけたような風味を持っていたのであった。

五

このごろ珍しく私の心をひいた新聞記事に、睡眠薬遊びと云うのがあった。十二、三歳の少年、少女が、ふらふらつとした夢ごこちになりたくて、睡眠剤を服用するのである。二、三度そういう事件があったらしい。アヘンを飲むのも酒を飲むのも、睡眠薬を飲むのも、似寄っ

た効果を人身に及ぼすのであろうか。

私は自分の年少時代を思出して、この睡眠薬遊びに親しみを覚えるのである。年少時代にそういう薬が得られたら、それを服用して、ふらふらつとした夢ごこちになろうとしたかもしれない。私は嬰兒の時から不眠症にかかっていた。明るい所では眠れなかったそうである。物心のつくころからは、何かにつけて眠りづらくって、夜中に泣き出すこともあったほどだ。

周囲のよく眠る男女がうらやましかった。ねたましかった。そのころ睡眠薬が容易に得られたら、買って飲んで

だかもしれなかった。それは眠りたいばかりでなく、今日の少年少女の睡眠薬遊びのような気持を空想していたのであった。日常現実の生活に何となく不満で、おもしろい夢のような世界にはいりたいといったような欲望が心にきざしていたのであった。小説などを耽読したのも、その夢の世界にはいらんと心がけていたためだが、それよりも、もっと深く、直截に夢を夢みるためには、睡眠薬のような霊薬の力を借りるのがよさそうである。私が昔そう考えていたごとく、彼ら少年少女は考えて、睡眠薬遊びを実行しているのではあるまいか。酒とか、アへ

ンとか、恋愛とか、夢の世界に遊ぶ手段はいくらも存在しているのであろうが、睡眠薬遊びは、端的に実行されて、しかも純真で、精神的で、しかも朗らかでありそうに空想されるのである。

私は、あの時分、そんな霊薬がなかったため服用はしなかったが、青年期から壮年期に移るころには適当な睡眠薬が手軽に得られるようになったので害のない程度で服用することとし、それが長い間の習慣になったのである。ところで、この服用は、眠りづらいから薬を用いるという平凡さで、今日の新聞に報道されている二、三

の少年少女のように、ふらふらつと夢ごこちになり、竜宮の世界のような所へ遊びに行かれるという、あどけない気持で服用するのではなかった。睡眠薬遊びという奇異な遊びを遊ばんとするのではなかった。

不老不死の薬はいまだ発見されず将来も出現しないであろう。「睡眠薬遊び」も、幼い者の幼い思い付きで、その薬によって、天国における遊びみたいな遊びが遊ばれるのではなかった。私の習慣になった睡眠薬服用なんかは、はなはだ散文的な見すばらしい所業で、どうにか眠るのは眠れても、さめたあとで、すがすがしい気持に

なるのではなかった。ところで、この数年来、いつとなくしに睡眠剤の必要はなくなった。むしろ覚醒剤を欲するようになった。やたらに眠くなった。汽車のなかでも眠れるようになった。夜になってコーヒーを飲むと睡眠に害があるからいけないと、昔から思っていたが、今はそれがウソになった。結構な事のようにだがこれも老衰の結果であるようだ。よく眠ったあとでは、目がさめてから頭がすがすがしく晴れ晴れしくなるのかと思うとそうでもない。老衰の結果の眠りは眠りにも力がないようだ。それで少年少女の睡眠薬遊びは新聞記事によると結果が

よくないようだから、模倣者はあまり出て来ないだろうが、遊びでなしの睡眠薬服用者はますます増加するであろう。

「それでも昔はよかった。町を歩いていても、人に会っても、のどかであった。せかせかしないで日が送れた」と、私もそう思うことがある。私が昔というのは、明治時代の事なのだ。そう思いながら、最近刊行のある「現代文学全集」に収集されている明治時代の文学者の写真を見たのであるが、あのころの写真術の幼稚であったせいでもあろうが、概して薄ぎたないのである。個人の写

真も、会合の写真も、一見してすぐに薄ぎたなく思わされるものばかりである。服装も粗末だし、顔面も生氣に乏しく、形も整っていない。私などはことに貧弱な相好をしている。すべての写真面にみずみずしい若さなどは写っていないのである。実際はどうであつたか、はつきり記憶に残っていないので、批判を避けることにしても、あの時代の文学社会が、生氣潑刺としていなかつたことは、これら写真帳によつても推察されるのである。今日の方がはるかに勢いがいいのである。外面そとづらばかりでなく、内容もすぐれているらしい。私などが読んで、詰まらな

い作品の乱出と思う事があるのも、それは明治頭で見るからだろうか。

六

私は、自分のからだの弱いのに気づいていた少年時代から、健康には注意した。小机の前にすわってやたらに本を読むのが癖になっていたが、それはからだのためによくはないと思って、他郷にいても故郷にいても、毎日適度な運動をすることにした。井戸水を頭からかぶる冷水

浴もやった。それらの行為は、私の健康保持に効果があったらしかったが、幼い時から家庭が平和であったのと、学問にでも、文筆業にでも、過度に精神を労しなかつたので、私はほそぼそながら長生を続けられたのである。私は徹夜して読書執筆したことはなかつた。何か書きだしても、書きづらくなると、いい加減でちよん切るのを例としていた。どうでもいいじゃないかと思うのが、私の製作態度になっている。だから多少長い作品はたいいてい中途はんぱになっている。小説書きははじめのころ、大町桂月が、私に向かって「国木田独歩の小説は簡潔だが、

君のは書き足りないのだ」といったことがあったが、これは適評であると、すなおに受け入れた。私は書き足りない小説を何百篇か書き続けた。

作品ばかりではない。私は人生その物をも、見きわめないで、素通り同様に過ごして来たように思っている。見きわめたつもりで見きわめないのである（特殊の人を除いて、多数者はそうなのだろう）。私は、旅行して、自分の旅行振りが素通りであるのに、常に気づいている。私は十日間、ソ連の領域に滞在して、モスクワとレニングラードとを見物したが、これは私の旅行態度の見本の

ようで、いかにも素通りであったと記憶している。大使館の世話で、ある女性が案内役になってくれたが、たいていは単独であちらこちらを見て歩いた。イタリアやドイツでは、文字が当て推量でも、いくらかわかるのだが、ロシアでは一字も一語もわかりやしない。国柄が国柄だし、一人歩きは薄気味悪かったが、それでも、街上で接触する人間は、鬼でもない蛇でもない、むしろよその国の老若男女よりも親しまれそうにも思われた。

私の日本内地の旅行もたいていはひとり歩きで、土地土地の名所古蹟も、見たり見なかったり、見ても深い研

究なんかしたことはない。法隆寺へは何年も続けて行っていったのだが、あのすぐれた仏像などについて芸術的眞価は今なお知っていないのである。知っていないのにかかわらず、これはこれで、ありがたいと思われ、ちよつと脱帽したいと（私は老年になってから、かえって帽子をかぶらなくなっているのだが）思われるのは、伝統的迷信によるのか。

私は、昔からの懇意な友人はすべてなくなっているの
で、胸襟を開き、肝胆相照らして、話をかわすような相
手はないのである。孤往独行の人世の旅は心さびしいと

思われなくてもない。

「ほどよい年ではあき足らず、もつと長い命を望む人は、わたしの目には明らかに愚か者だ。長い日は多くのことを喜びよりも苦しみに近づけ、長生をし過ぎた者には、楽しみはどこにも見当らない」

これはギリシア悲劇中の合唱団の歌詞である。異国の昔の唱歌は、不朽の味わいを含んで、今日の私などの耳にも心にも伝わるのである。しかし、どうにもならないのである。詩人はどうにもならないことを、ただ見詰めながら嘆声を発しているのである。

「この世に生を享けないのが、すべてにまして、いちばんよいこと、生まれたからには、来たところ、そこへすみやかにおもむくのが、次にいちばんよいことだ」

合唱団ではこううたいつづけているが、これは「この世に生を享けたのが、すべてにまして、一番よいこと、生まれたからには、ゆっくり生き延びるのが次によいこと」という人間の本心を裏返しにしてうたっているようなものだ。

人世を素通りした私には、どちらがどちらやらわからないままに、世を過したと感じながら、きのうを送りあ

すを迎えている。

ここまで書いて一段落をつけたところへ「心」の十月号が着いたので、開いて見ると、そのなかに「明治は遠くなりにはけり」という題目の座談記事が出ていた。明治生れのわれわれには、遠くなった明治がなつかしいわけだが、今よりも住みづらかったのは明らかである。学校の教場が寒くって、ふところ手で、ガタガタ震えながら講義を聞いたことなど、その住みづらかった標本の一例である。しかし、私がこのごろ明治時代を思出して興味を覚えたのは、寒暑や晴雨についてコセコセ思いわずら

はなかつたことである。少くも私は天気予報などを、あまり気にしなかつた。台風がいつどこへ来るやら、あすは雪が降るとか、そんな事にうるさく拘泥こうでいしなかつた。途中で着物が雨にぬれたら、行った先で裸体になつて火にかわかして着て帰るぐらい平氣であつた。台風がどちらを通るか、何日も前から氣に病むこともなかつた。貧しいながら、乏しいながら、行き当りばつたりの生活がかえつて氣樂であつたのではあるまいか。

七

次第に執筆が大儀になって来た。年齢がこんなにかさばったのだから当然のことである。よたよたと筆を運ばせて、文学雑誌の創作欄に出してもらえような物を書くよりも、潔く文筆業を廃業したらいいだろうと、数年前からたびたび空想裡の文壇に廃業届けを提出する気持になっっているのだが、多年の習慣で、なんにも書かないでいると、物忘れしたように思われるのである。それで短い雑文などをたまに書いているが、それさえ筆が重く

気軽に書けないのである。

私は先日、何日か続けてテレビで相撲を見た。私はスポーツには全然興味がないのだが、相撲だけは昔はおりおり見ていた。私の人生傍観態度からいっても、だれをひいきにすることはないのでから、おのずから相撲興味は薄らぐ訳である。土俵場を文壇と見なし、作家を力士に見立てることもあったが、力士とちがって作家の優劣はどのようにでもいえるのである。先日、山本健吉君が宇野浩二追悼記のなかに、宇野が彼に向かって、「藤村、秋声は横綱で、白鳥は張り出し横綱だ」といったことがあ

ると書いてあった。それを読んで思出したのは、昔相撲好きの滝田樗蔭が、私に向かって、「あなたは、横綱とか大関とかいう柄じゃないんですよ。関脇か小結かというところで、それでおりおり横綱を倒すんです」という意味のことを、滝田的東北弁で笑い笑い言ったことがあった。滝田は終始私をひいきにしていたので、この評は私を軽視したことにもならないのだが、私は適評だと思った。それに、私は横綱、大関として人世を渡りたくはなかった。

さて、このごろ私は、テレビで相撲を見ていたが、文

壇をもテレビで見ているような気持で見ているのである。私は文壇の土俵上では、長い間力士でもあり行司でもあったのだが、近来は功成り名遂げて、隠居気取りで文壇を傍観しているのである。「若い者があんな相撲を取っている」と蔑視することもあるが、彼らの過重な労働について同情し、あるいはあわれを催すのである。回え向院時代こういんには、晴天十日の、年二回の本場所で、真剣勝負をするだけであつたのに、近年は、年中何回も本場所があつて、しかも一回が十五日も続けられるのだから、昔とは比較にならないほどの苦勞ではないかと、傍観者

には推察される。小説社会でもこれと類似している。あんなに多量に書かされてはさぞ苦しい事だろうと傍観者には想像される。これは相撲とはちがひ、作者の自由意志で多作するので、多作によって利益が膨張し、名声も拡大することゆゑ、味をしめると、なかなかやめられないものらしい。昔の私などでも、今のごとく販路が広がって、自作本の売れ行きもよかったら相当に書きなぐっていたかも知れなかつた。自重して見たつて、書けなければ書けないのだから、書ける時、品物のはける時にうんと書きうんとかせいだ方がいいのであろうか。

西洋でもそうだが、寡作者必ずしも傑作の産出者ではなく、乱作者必ずしも悪作の製作者ではないかも知れない。ドストエフスキー、バルザック、あるいはエミール・ゾラなどの文学史上の文豪は、いずれも長つたらしい傑作を多量に残している。乱作必ずしも悪作ではない実例を示している。日本今日の文壇にでもそういう傾向が見られだした。吉田健一君の大衆小説評によると、日本今日の文壇には、毎月のように世界的傑作が出現しているらしい。西洋の文学を重視し、日本のそれを軽視する癖のついでに私などには腑ふに落ちないのだが、それら

日本製の世界的傑作をよく読んでいないのだから、何ともわかった口はきけない。それら傑作物も、そのうちの何かを幾つかは読んでいるが、ひととおりのおもしろさはあってもふたとおりのおもしろさは感ぜられない。現代ではいろんな方面で新味が出ているのだが、小説の方では、ビツクリするような新味はない。人間は人間としていつの世も同じ事で、人道人情、ワイセツ、殺伐、貪慾が入りまじって、小説面に現われるのだが、作者の小説的個性が、切れ味よく、あるいはねばっこく読者の心に染む趣のあるのは、今のところ見当らない。歴史小説

を読むと、これなら、歴史そのものの方が、はるかに気持よく読めそうに思われるし、現代物を読むと、じょうずな筆で書いてあるものが、みんなうそのように思われる。谷崎潤一郎君の説によると、自然主義風のありのまま小説は読みがいがなく、小説はむしろそをうまく書いたものがいという事なのだ、これも見えすいたへたなうそはつまらない。真実に裏付けられたうそでなくっては、読者を夢の世界にひき入れる訳に行かないだろう。

しかし、私の多年の経験によると、小説読みの少年少

女の知能は発達進行が鈍いように思われる。つまらない作家の描いた夢の世界へ、ひき入れられたら一生の損失だ。私に子女があつたら、ありふれた小説を読むことなんか禁じたいと思っっている。

八

私は近年、ほとんど芝居を見なくなつた。私のいわゆる芝居とは歌舞伎の事である。日清戦争直後、私が十八歳ではじめて上京したのだが、青春の芽ばえていた私の

頭に宿っていた上京目的は、英語修業であったが、かた
わら、キリスト教の知識を吸収することと、芝居（すな
わち歌舞伎）を見ることであつた。上京前には、雑誌は
「国民之友」、新聞は国民新聞を購読していたのであつ
たが、そのころの国民新聞には、久保田米僊べいせんが劇評をや
っていた。はなはだ平凡な劇評であつたが、その平凡な
劇評によつてでも、東京の劇場を憧憬していた。団菊合
同の歌舞伎讚美の評語を、今でも断片的に記憶している。
上京後も、東京の中心は歌舞伎座であるように感じて
いた。かろうじて団菊晩年の名技を見る事数年。羽左衛

門、梅幸などの、彼ら相応の名演技を見る事十数年。めんめんとして歌舞伎座を見続けたのであったが、近年はほとんど見なくなつた。それで、先月、開場七十年記念劇を見て、今昔の感にたえない思いをしたのであった。

必ずしも俳優の芸がへたになつたためでもない。親まさりといわれた六代目菊五郎や吉右衛門のような名優が出たし、その後の歌舞伎役者にも、かなりにすぐれた者がいるのであろうが、年のせいか、私に歌舞伎興味がうせたらしいのである。劇中人物が封建的古さにひたつていて、現代人の心理では共鳴し難い行動を採っているた

めに、興味を失ったのではない。真山青果の新作「将軍江戸を去る」などでも、勤王とか尊皇とかの差別論だの、「上様」がどうかこうとかの言葉使いだのに、封建的古さを、見ていて聞いていてあほらしく感ぜられるために、歌舞伎興味を失ったのではない。歌舞伎は古いなりに、純粹に古いなりに、観客を夢幻境に誘うおもしろさを舞台にただよわせていたので、見物人の私などは、封建性も民主性も忘れて、その夢幻境地に遊び得られたのであったが、私は年をとってから、その古めかしさに心魂をとらえられなくなった。俳優も現代人であるため、

歌舞伎が歌舞伎なりに持っていた純粹の古さを舞台の上に現わし得られなくなった。それで、私はいろいろ理窟をつけてみたが、私が歌舞伎に陶醉し得られなくなったのは事実である。

しかし、私はどうかして歌舞伎が、昔ながらの特有の魅力を保ちながら存在を続け得ないものかと空想している。ほろぼすのは惜しいのである。年少期に、全力を尽くして学ばんと志した英語も、次第に忘れてしまい、キリスト教についても、懷疑と信仰の境地をうろつくばかりで、どちら向いても影が薄くなり、カブキも、こんな

ものはどうでもいいと思いながら、いまだに多少の愛著を覚えているような状態である。われとわが身をあわれむべきか。

芝居は歌舞伎とみなしているのは、私の保守思想の現われとしてもいいのであろう。私は政治問題、外交問題などに関する知識ははなはだ乏しいのであるが、これらの問題についても、概して保守的傾向を持っているようだ。本業の小説に関しては、昔から進歩派に属しているように、世間から見られていたが、進歩色は付焼刃で根底には保守的根性が居すわっているのかもしれない。年

をとるとますますそうなるらしい。国会議員選挙の時、個人として推薦すべき人間が、候補者のうちに見つかからないと、保守党からだれかを選ぶのを例としていた。理論として保守主義を尊重するはずはないのだが、感情的にか何的にか、進歩派の言い草がきらいである。少くも私の一生の間は、日本はこのままで存在を続けていられればいいと思っている。一生の間といっても、私の余命はいくばくもないのであるが、その短い間にでも、世界にどんな事が起るかもしれぬ。覚悟していなければならぬ。

文学人でも、筆や口でいつているごとく、現代の世界の危機を真剣に痛感し、今度戦争が起ったら、人類が絶滅する恐れのあることをほんとうに信じているのなら、そういう信念をいだいている文学人の詩にでも小説にでも、絶望の悲壮感がみなぎるはずではないだろうか。あるいはそういう信念の下に作られた戯曲が上演されて見物の心をとらえて、満場寂^{せき}として、遊びでない演劇鑑賞にふけることもないだろうか。現在の芸術界にそういう現象がまだ起っていないのは、みんながまだ真剣に世界の危機を痛感していない証拠である。ありきたりの平和

運動や、核兵器廃止の署名運動ぐらいで、世界危機、人類絶滅の危機がせきとめられるとでも思っているのか。

人類滅亡を夢見ながら、その夢見る気持を文字で現わした詩や小説はついに出て来ないものか。

九

幾日も秋霖しゅうりんがつづいて陰鬱であつたが、きょうの日曜はどうにか晴れてさわやかである。天気予報では、明日あたりから、天气がまたぐずつくそうだが、今日一日

だけでも快い秋びよりに親しめるのは幸福である。私は常例の一時間ほどの散歩をして帰って来ると、数種の月刊雑誌や二、三の新刊書が、郵便箱に押し込められてあった。

私はそれらの書類をところどころ読んできょうの空想の餌ばとすることにした。ある雑誌の十月号所載の竹山道雄氏の東西ドイツの見聞録や、伊藤正徳氏の「帝国陸軍の最後」などは、通読して感銘深き思いをした。けさ散歩に出る前に、歌舞伎座の「桐一葉」をみようかと、珍しく観劇慾を起しながら、ちよつとしたさわりがあつ

て、それは他日に譲ることにした。「桐一葉」は久振りの上演であろうが、こういう芝居が今日の見物に喜ばれるであろうか。私にとっては思出の深い芝居である。それで私は、新刊雑誌を読みながら「桐一葉」初演当時の日本の世相や劇壇の状況を追懐した。五十余年前、日露開戦の当時であった。そのころまでは、文学者の脚本は劇壇ではほとんど採用されなかつたので「桐一葉」の上演は劇界では劃期的の事件であった。芝翫（後の歌右衛門）我当（後の仁左衛門）が東京座でやることになったのだが、名優が上演するのだから、作家がさぞ喜ぶだろ

うと、劇場では軽々しく取扱い、作家の許可を得る前に、勝手にきめて新聞にも発表して、そのあとで、劇場から作者部屋のだれかを、当時熱海滞在の坪内逍遙の宿に送って報告させたのであった。逍遙先生は、劇場の無礼を激怒されたのである。先生はそういう事を予想されていて興行権を登録してあったので、上演は差しとめると、劇場の要求を突っ放した。劇場の使者が平身低頭してわびを入れ、逍遙夫人の取りなしがあつて、ようやく許可される道がついたのであつたが、この間の経路は、新聞の劇評をやりだしたばかりの私に、先生から委細報告さ

れた。その手紙は小説のようで、いかに劇場の使者がへこまされたかが察せられた。私は、こんな手紙をもらったことを身にあまる光栄として「桐一葉」劇宣伝につとめた。この脚本上演以後、文学者の作品も劇場で多少尊重するようになったのであろう。爾来五十余年、文学者創作の戯曲も、多量に産出されたのだが、一代を風靡するような作品がどれほど出た事か。黙阿弥の作品ほどのものも出ていないではないか。しかし、私がこう思うのは、私の目標が高いためなので、小説でも演劇でも、読者や見物を喜ばせる者は続々と出ているので、それなれ

ばこそ、劇場も栄え、出版業者も栄え、役者も作者もはなやかな暮らしをしていられるのであろうか。

とにかく、私は「桐一葉」を、文学者のまじめな作品の最初の上演として記憶している。この芝居はその後幾度か繰返して上演されていたが、私のみた限りでは、初演にまさるものはなかったようだ。それから、私は「桐一葉」そのものよりも、作者が劇場の使者を叱咤した光景や、私自身も、我当、高麗蔵など、おもな俳優を訪問して苦心談をきいたりしたこと、思出としての興味が感ぜられるのである。

小説も演劇も、畢竟遊びであるが「帝国陸軍の最後」を読むと、戦慄を覚えるほどの形勢の連続である。私など真相を知らないでぼんやり生きて来たのであった。実人生における無知の幸福であるともいえよう。恐ろしい苦境に陥っていながら、軍部が国民に真相を隠していたのは非難すべきであろうが、一々知らされていたら、われわれは一夜も安んじて眠れなかつたであろう。どの方面においても真実に徹して知り尽くすことは人間の幸福であろうか。今日このさわやかな秋びよりに浸りながら快く生きているのも、あすを知らないためであるともい

われよう。「明日の事を思いわずらうなかれ。一日の苦
労は一日にて足れり」という聖語も消極的な処生態度で
あるが、この言葉も意味深長である。知識慾旺盛な人間
は、宇宙の終極までもきわめ尽くさんと志すのであろう。
小説家なら人間の心の底の底までも探索し尽くさんと志
すのであろう。そういう態度の人々は尊敬に価するので
あろうが、私などは長年月の経験で、自分の知能であえ
てし得ないことが、わかり過ぎるぐらいわかっている。
「帝国陸軍の最後」を読んでも、ああなるのが宿命で、
どうにもならなかったのではないかと思われた。後にな

って、物知り顔に批評しても、あの当時は、知者も勇士も宿命を打破することはできなかつたのであろうと思われる。ギリシア悲劇を読んでも、宿命に抵抗せんとして、ついにあえてし得なかつたことが痛感され、吐息してうなだれるのであるが、日本の敗戦経路を読んでも、それに似通った感じに打たれた。

十

竹山道雄氏の歐洲見聞記を読み、取扱っている材料に

心ひかれた。ベルリンの老人寮を見たことから、はなしを始めているのである。「ヨーロッパでは老人の問題が深刻である」といい、「ドイツでは貧困の問題は解決したが、老人たちは恐るべき精神の孤独を味わっている。富めば人情がなくなつて、老いた親の世話は社会保障がするものということになり、老人は人生の流^る謫^{たく}の境涯にある」といって、その実景を細叙している。

老人の孤独は日本でも実現している。家族制度の行き届いていた昔は、老人も大切にされていたが、今日は次第に邪魔にされるようになって、いや応なしに孤独を味

わわせられるようになりつつあるのだ。世^せ智^ち辛^がい世の中
では、働きのない老人なんかにかまっていられなくなっ
たのだ。日本でも老人ホームなんか次第に造られるよ
うになったが、西洋同様、そんなことで精神の孤独をま
ぬかれることはできないだろう。精神の孤独がいやなら、
前回私が引用したギリシア悲劇の合唱団の詞句が示して
いるごとく「ほどよい年ではあき足らず、もっと長い命
を望む人は、わたしの目には愚か者」と見なして、いい
加減の時に、檜山へでも行ったらいいのだろう。家族の
中にいて、子孫に囲まれていても、老人は孤独感に襲わ

れるのであろうが、私などは、世間へ出て、青年の間にはいつていても、あるいはひとりであちらこちらと歩いていても、年々孤独感が深まっただけである。しかし、その孤独感は、愚かなもの、心さびしいもの、哀れなものというだけではなく、永遠の生命でも宿しているような孤独感にふけっただけである。自分だけで人世を傍観しているような孤独感である。政治にも哲学にも、あるいは恋愛にもわずらわされない孤独感。

かくて私は、与えられたる書物を読み、こんなことを空想しながら、秋の一日を過した。机のそばには、こな

いだまでの続く暑さに使われていたうちわが捨てられている。ある百貨店の寄贈ものだが、それには、男一人と二人の女性のおどけた姿形の踊り模様が描かれ「国土あんおん、民はゆたかで、治まる御代のしるしとして、かねてぞ植えし住吉の、浜の松風めでたさよ。あら住吉様の」と、うたの文句がしるされている。さてはこの踊りは住吉踊りなのか。私は、うちわを持った三人のこの踊りぶりをおもしろいと思いつながら、しばしば暑さ払いにこのうちわを用いていたのであった。

竹山氏の歐洲見聞記のなかには「あるイギリスの老婦

人が日記の最後に、きょうもだれもわたしに話しかけてくれなかった」と書いて自殺したという事件が取り入れられてあったが、きょうの日は、私の方からだれにも話しかけなかった。自分の方から話しかけないのならそれでいいとして、自分がだれからも話しかけられなかったら、あるイギリスの老婦人のように自殺でもする気になるのであるだろうか。自分の方から雑誌などの原稿の依頼を断るのはいいが、どこからも依頼がなくなつて、たまにこちらから原稿を持って行つても、体よく断られるようになったら、自殺でもする気になるであろうか。かつて

文春のK氏から「ジャーナリズムは冷酷ですからなあ」と聞かされたことがあった。売物になる間はちやほやするが、いけなくなると、へいり敝履（やぶれグツ）のごとく捨てて顧みなくなるのである。こんなことは、ジャーナリズム以外のどこでも適用するあたりまえのことだが、イギリス老婦人の自殺に連関してそれを思出した。

竹山氏の目ざしている沈黙のなかの真実は、おしやべりのなかの真実より意味深いものであるうが、たいいていの人間はよくしやべりたがるもので、沈黙のうちに深く真実を蔵することはむずかしい。執筆業者は、口の沈黙

を守っていても、筆先でおしやべりをしているのである。筆の達者な人といわれる人の論文など読むと、堅苦しい用語を並べた生氣のない文章に接するだけである。小説だって、筆が達者でながながと書かれたものには、おしやべりの浮世話みたいのが多いようである。概して女は男よりもおしやべりであるが、それでだれもおしやべりの相手になつてくれなくなると、自殺したくもなるのか。ダンヌンチヨのある小説に、社交界に名の売れた美貌の女性が、自分の容色の衰えに気づいてからは、世間へはいっさい顔出しせず、邸内にこもって残生を過ごしたこ

とが語られていた。美女が美を失ったら生くるにかいな
きか。岩野泡鳴が、死ぬるのはバカだといったことから、
この雑文は書きはじめられたのだが「頭が衰えて役に立
たなくなったら、舌をかんで死ぬる」と、泡鳴のいった
ことも思出されたので、その語をこの雑文の結末としよ
う。しかし、舌をかむのは痛かろう。

(昭和三十六年十月)

日本文学電子図書館

秋風記

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系16 正宗白鳥集
筑摩書房

昭和44年7月15日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館